

シリーズ 第46回

おきのかまえ

沖構攻防記

円宗寺にある夢広場から西へ約一五〇mあたりに広がる畑地一帯は、戦国時代には「構」がありました。

「構」とは、平地などに築かれ防御施設を備えた豪族の城館のことで、町内でも河内構（河内）、鳴津構（真加部）、岩棚構（入）など各地に構跡があります。

円宗寺にあった構は「沖構」と言われています。元禄四年（一六九一）編纂『作陽誌』には「苦西郡円宗寺村にあり、芦田右馬允の旧跡で沖構という。東西二十三間、南北五十六間、四方は水沢があり、澱みの深さ四、



沖構跡

五尺で人馬は渡ることができない」と書かれているように、四方を深い堀で囲んだ芦田右馬允という人物の構だったとされています。現在は耕地整理などにより地形が明瞭ではありませんが、東側と北側には若干窪んだ堀跡がなおその痕跡を留めています。明治時代の地籍図には周囲の堀跡がはっきりと残っており、南北約一二〇m、東西約五〇mの長方形の区画であったことが想定できます。芦田右馬允は、備前大名・宇喜多家の武将ですが、『作陽誌』では、「永禄の頃（一五五八〜七〇）、敵対する毛利方の兵が大田和城（大野の整合）〔竹田〕のある丘陵上」と、茶臼山（寺元と沖の境）に付城（城を攻めるために築いた臨時の城）を築き、沖構を攻めたが、右馬允は堅く守っていました。そこで毛利方は、大田和城の近くにある築山という小さな丘にやぐらを建て、そこから大砲で砲撃すると沖構はついに落城した」と伝えられています。

美作の地は、その後織田信長を後ろ盾とした宇喜多家と毛利家の争点となり、沖構はこの戦の後には毛利家の支配下でした。しかし、天正一〇年（一五八二）、本能寺の変で信長が死去した後、中国攻略を担当していた羽柴秀吉と毛利家の間で和睦が成立しましたが、美作ではなおも戦闘状態が続き、翌年、今度は宇喜多家が沖構の攻略に乗り出します。

この時の戦いについては、当時の書状から断片的に知ることができ、六月下旬、毛利家の吉川元春（毛利元就の次男）は、支配下の枳形城（香々美）の矢野又右衛門尉や高山城（津山市）主の草刈重継に対して、「沖構は堅固に守っているが、宇喜多方が付城等を構えて迫っており、山陰や備中の兵を加勢に送る」という内容を手紙で伝えていきます。

宇喜多方の付城については、具体的な場所の記録はありませんが、現在の鏡野中学校のある一帯には「斎藤丸」の地名が残っていることから、宇喜多家の武将で小田草城（馬場）主・斎藤親実が沖構攻略の際にこの地を陣所とした可能性も考えられています。

この戦闘で、沖構に籠城した武本源兵衛は、鉄砲で敵を数人討ち取り、毛利方の武将で葛下城（中谷）主・中村頼宗から、その手柄を賞した感



大田和城跡



茶臼山陣地跡

状を与えられています。一方、籠城勢が宇喜多方の武将・花房職之の付城に夜討ちした際には、戦之の家臣・難波又市郎が攻め手の興津市郎を討ち取り、敵を撤退させたことから、又市郎は宇喜多家から感状を与えられたといえます。そして間もなく沖構は落城し、美作も宇喜多家の所領になります。

こうした戦闘が繰り返された地も、今はただ「兵どもが夢のあと」と、僅かに残る沖構や大田和城・茶臼山の痕跡のみが往時を物語っています。

参考資料：『作陽誌』、『鏡野町史』、『通史編史料編』、『美作国の山城』、『美作古城史』、『美作国府館構城下町の検証』

生涯学習課 日下

電話(0868)54-7733